

問題と研究



アジア太平洋研究専門誌

2025年3月

第54巻1号

特集論文:日本・ロシア情勢

- 久保庭眞彰 ロシア・ウクライナ戦争のロシア経済へのインパクト:
経済成長と国際貿易を中心として
- 楊鈞池 「岸田政権」から「石破政権」へ:「安倍政治」の遺産とその消失
- 北村亘 官邸主導の理想と現実:2019年及び2023年の官僚意識調査から
見た政策形成
- 汪哲仁 「内を治めるにはまず外を」—ロシア・ウクライナ戦争下における
プーチン新政権のロシア金融政策の課題—

会議録

- 徐興慶 「東アジア日本研究者協議会」第八回国際学術大会 会議実録



目次

特集：日本・ロシア情勢

ロシア・ウクライナ戦争のロシア経済へのインパクト： 久保庭真彰---1

経済成長と国際貿易を中心として

「岸田政権」から「石破政権」へ：

楊鈞池--35

「安倍政治」の遺産とその消失

(訳：田中研也)

官邸主導の理想と現実：

北村亘--69

2019年及び2023年の官僚意識調査から見た政策形成

「内を治めるにはまず外を」—ロシア・ウクライナ戦争下における 汪哲仁-105

プーチン新政権のロシア金融政策の課題—

(訳：阿部久美子)

会議録

「東アジア日本研究者協議会」第八回国際学術大会 会議実録 徐興慶-139

著者・訳者紹介 ----- 151

投稿案内・編集後記 ----- 155

【会議録】

「東アジア日本研究者協議会」 第八回国際学術大会 会議実録

徐 興 慶

(台湾・東呉大学講座教授 / 客座教授)

一 縁起

「東アジア日本研究者協議会 (East Asian Consortium of Japanese Studies, EACJS)」の前身は、2010 年 4 月に韓国の済州島で、韓国日本学会主催、国際交流基金共催により開催された「東アジア日本研究フォーラム」である。以降、日本、中国、韓国と主催地を交代しながら、年に一度のペースで開催されてきた。その二回目目が終了する際、東アジアの各大学の若手研究者、特に博士課程の院生も参加できるように、2016 年 11 月 30 日「東アジア日本研究者協議会」が発足し、翌日から 12 月 2 日にかけてソウル大学主催により、韓国の仁川で第一回国際会議が開催された。

本協議会の趣旨は、国境を越えた日本研究者の学術的な交流の場を作ることと若手研究者の育成にある。本大会は、東アジアを中心とした国々の研究者に、多様な分野において蓄積されてきた日本研究に関する成果を発表・議論する場を提供し、日本研究と日本研究者の国際的交流の発展に寄与することを目的としている。本大会が誕生したゆえんは、北米を中心としたアジア学会 (Association for Asian Studies, AAS)、欧州を中心とした欧州日本学会 (European

Association for Japanese Studies、EAJIS) に対し、東アジア地域にはたくさんの日本研究者が活動しているにもかかわらず、個人あるいはグループ単位での交流にとどまっていたからである。当時はまだ東アジアの日本研究者が、一堂に会して交流する場は作られていなかった。

そのため、五名の発起人¹により東アジアの日本研究機関を中心とした「東アジア日本研究者協議会」を発足し、協議を重ねてきた²。その趣旨として第一に、日本研究の質を向上させること、第二に、地域の境界を越えた多様な視点による日本研究の促進と学際的基盤を確立すること、第三に、東アジアの安定と平和への貢献、客観的理解を深め、研究者として安定的な東アジア関係の形成に寄与することである。そのほか、東アジアの日本研究者が一堂に集まり真剣に討論しあい、交流することも目的としている。協議会は将来、東アジア地域を網羅する学会の設立を前提にしたものである。この学会が設立されれば、北米のアジア学会(AAS)、欧州の欧州日本学会(EAJIS)とも連携し、東アジアという地域を超えた学術交流と人的交流がより一層活発になることを期待しているところである。

上記に述べた趣旨をもとに、東アジア各国の日本研究機関が順次執行を担当し、年に一回の国際学術会議を開催することとなって

¹ 朴喆熙(前ソウル大学校国際大学院院長)、徐興慶(台湾・元中国文化大学学長)、小松和彦(元国際日本文化研究センター長)、徐一平(前北京外国語大学北京日本学研究所教授)、李康民(前漢陽大学校日本学国際比較研究所長)。

² これまでに「東アジア日本研究フォーラム」として韓、日、中三国の順で六回ほど開催してきた。詳しくは拙稿「第5回『東アジア日本研究フォーラム』会議実録」『問題と研究』45巻1号、67～76ページ。

いる。第一回は 2016 年に韓国の仁川（ソウル大学）で、第二回は 2017 年に中国の天津（南開大学）で、第三回は 2018 年に日本の京都（国際日本文化研究センター）で、第四回は 2019 年に台湾大学³で、それぞれ順調に開催されてきた。2020 年はコロナの影響で中止となったが、2021 年の第五回は韓国の高麗大学、2022 年の第六回は北京外国語大学日本学研究センター、2023 年の第七回は東京外国語大学国際日本研究センター、そして 2024 年の第八回は台湾の淡江大学が主催機関となり開催された。これまでの協議会は、いずれも 300 名にのぼる日本研究の学者や博士課程の院生等が一堂に集まり、人的交流・知的交流において一定の成果をあげたものと思われる。

「東アジア日本研究者協議会 第八回国際学術大会」は、台湾日語教育学会の主催⁴及び諸機構の共催・協力によって⁵、2024 年 11 月 8 日から 10 日にかけて、淡江大学淡水キャンパスで開催した。大会初日、筆者は発起人の一人として開会の挨拶を述べ、本協議会設立の目的は国際学会への転換、東アジアを視野に入れた日本研究であることや、東アジア学研究的連携と統合の背景を説明した。その後、本大会の執行委員長である曾秋桂教授から、開催準備の経緯

³ 詳しくは、拙稿「『東アジア日本研究者協議会』第四回国際学術大会 会議実録」『問題と研究』49 巻 2 号、1～12 ページを参照されたい。

⁴ 台湾日語教育学会の理事長・曾秋桂教授が第八回の台湾大会の執行委員長となった。

⁵ 独立行政法人国際交流基金、公益財団法人東芝国際交流財団、台湾の国家科学及び技術委員会などが助成機構となっている。そして後援は、淡江大学村上春樹研究センター、日本比較文化学会、韓国日語教育学会、台湾日本語学会、公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所などとなっている。淡江大学の曾秋桂教授をはじめ、準備委員会の先生方、スタッフの皆様が協力してくださったことに、御礼申し上げる。

を報告した。また、淡江大学の陳小雀国際交流副学長、および独立行政法人国際交流基金日本研究事業の塩澤雅代第 1 チーム長、東芝国際交流財団の山崎裕紀専務理事の挨拶によって開幕した。

写真 1 東アジア日本研究者協議会 第八回国際学術大会の開幕式



二 基調講演の主要内容

1. 淡江大学資訊工程学系特聘教授（情報工学科名誉教授）の張志勇氏⁶は「生成式 AI 対人文社会領域研究の新契機（生成 AI の人文

⁶ 張志勇氏は台湾・中央大学博士（資訊工程）取得。現職は、台湾・淡江大学特聘教授、淡江大学工学院 IoT 及びビッグデータ研究センター主任、滁州学院兼任特聘教授、北京交通大学兼任客員教授、教育部教育実践プログラム再審査委員、台灣 ACM SIGMOBILE Chapter 国際組織共同委員長。かつては科技部情報分野の再審査委員を務め、SCI および EI に収録された多数の学術誌の編集委員および客員編集を歴任。これまでに 300 本以上の論文を発表し、そのうち 100 本以上は国際的に著名な SCI 収録の学術誌に掲載された。IEEE や ACM Transactions などのジ

社会学研究に対する新契機）」とのテーマで講演した。

近年、生成 AI の技術が急速に台頭し、人文社会学分野の研究にこれまでにない機会と挑戦をもたらしている。生成 AI は、テキスト、画像、音声、動画などの多様なコンテンツを自動生成することが可能であり、従来の研究におけるデータや情報処理、創作の枠を打破した。これにより、言語、文化、歴史、教育などの分野において、全く新しい視野から探求することができるようになった。本講演は下記の四点をまとめて分析した。(1) 生成 AI の概念とその思考方法を紹介し、実例を通じてその優れた能力を示し、(2) 生成 AI が多くの分野で活用されている事例を解説し、これらの事例を通じて、医療、介護、教育、人文社会学など、様々な分野において利用できる環境を理解した。また、(3) 生成 AI が人文社会学分野の研究者にもたらす発展の可能性と、それに伴う挑戦について説明し、(4) 生成 AI の幅広い応用に伴う倫理的・社会的課題について探究した。

本講演では、生成 AI の発展動向や様々な分野での潜在的な価値を共有するだけでなく、この技術の発展には人文社会学分野の学者が積極的に参加することの重要性も強調した。そうすることで、未来の AI が人文的な教養と知恵を備え、倫理と法を重視し、創造と道德のバランスを保つことができるようになる。これにより、質と量を兼ね備えた AI サービスを人類に提供し、社会に長期的なプラスの影響をもたらすことが期待される。

ジャーナルに掲載された論文も含まれる。また、200 本以上が IEEE/ACM 主催の国際的に著名な学会で発表されており、多くの最優秀論文賞を受賞した。さらに、複数にわたり国際会議や兩岸会議を主催し、重要な役職を務めた。

2. 京都大学名誉教授の山室信一氏⁷による「東アジアという時空間を捉え直す—空間学と民際史による視圏の転回—」と題した講演の概要は、下記の通りである。

グローバル化は世界的生活様式の平準化をもたらすが、同時に個別的ローカルの固有性を際立たせて行く。その中で東アジアというリージョンや民族・国家というネーションなどの境界線は、次第に消失していくだろうとの想定の下に現れたのが「グローカリゼーション」であり、この議論を掻き消すスピードで普及したインターネットによって、時間と空間が含意していた「間＝距たり」も消えつつある。その現実はまだ、人と人の交わりの中で生まれる「人間」社会としてのコミュニティと、その媒介となる諸メディアの変質への対応という難題を突きつけてきた。

本報告では、まず国民国家と国民帝国とのパラレルな形成過程の中で現出した東アジア世界において、文化連関や思想連鎖の中で生まれた文化知・学知などの知層の上に、海図・地図作成や都市計画・建築などの技術知を担った技術官僚（technocrat）たちが、いかなる空間を造出したのか、を検討した。次に、「ムクリコクリ」などの民間伝承や「鮮妻・湾妻・満妻・からゆき」などの民俗語彙、そして源義経・大塩平八郎などの流離譚や小学唱歌・歌謡曲などに込められた人流の諸相と、そこに潜む東アジア、さらにはトランス・

⁷ 京都大学名誉教授の山室信一氏は 1975 年東京大学法学部卒業、1998 年京都大学博士（法学）取得。衆議院法制局参事、東京大学社会科学研究所助手、東北大学文学部附属日本文化研究施設助教授などを経て、京都大学人文科学研究所教授、同研究所所長をつとめた。著作に『思想課題としてのアジア』（岩波書店、2001 年）；『アジアの思想史脈 空間思想学の試み』（人文書院、2017 年）；『アジアびとの風姿 環地方学の試み』（人文書院、2017 年）；『モダン語の世界へ流行語で探る近現代』（岩波書店、2021 年）など、数々の著作が受賞した。

ユーラシアへと広がる空間心性の問題に触れたほか、日本国内や日本の植民地・傀儡政権下で使われた「郷土」や「郷土色」などによって空間再編とそれへの抵抗がいかに図られたのか、などの問題を取り上げた。

それらの問題の検討を通じて、空間形成と空間心性を探る「空間学」、さらに生活世界における人流とローカル・ナレッジ (Local Knowledge) の繋がりを探る「民際史」という視座を提示した。

3. 早稲田大学教授の森田典正氏⁸は「移りゆく世界システムと世界文学—東アジアの中の日本—」とのテーマで次のように報告した。

21 世紀の初頭、世界文学をめぐる言説の嚆矢となった、パスカル・カサノヴァ (Pascale Casanova)⁹ の『世界文学空間』 (La République mondiale des Lettres、1999 年) やフランコ・モレッティ (Franco Moretti)¹⁰ の「世界文学をめぐる推察」 (Conjectures on

⁸ 森田典正氏は 1978 年早稲田大学英文学科卒業後、同大学院文学研究科に進学し、修士取得。その後、イギリスのケント大学で 1982 年修士、1990 年博士 (文学) を取得。早稲田大学法学部助教授、教授を経て、同大学理事 (国際担当) をつとめた。現職は早稲田大学国際教養学術院教授。主な著作は『日本文学 / 世界文学 : 早稲田大学シンポジウム』 (成文社、2012 年) ; 『Japan beyond its borders: transnational approaches to film and media』 (成文社、2020 年) ; 『Japanese Transnational Cinema』 (MDPI、2020 年) などがある。

⁹ Pascale Casanova は、1959 年生まれ。論文『国際文学空間』で、パリ高等社会学研究所博士号取得 (文学社会学)。フランス＝キュルチュール (ラジオ・フランス) の文学番組ディレクターを務め、様々な文学専門誌の文学批評家としても活躍した。

¹⁰ Franco Moretti は 1950 年イタリア、ソンドリオ生まれ。スタンフォード大学名誉教授。主な著書に、『ドラキュラ・ホームズ・ジョイス—文学と社会』 (新評論、1992 年) ; 『The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture』 (Verso、1987 年) ; 『Atlas of the European novel, 1800-1900』 (Verso、1998 年) ; 『Graphs, Maps, Trees: Abstract Models for a Literary History』 (Verso、

World Literature、2000年）は、いずれも、イマニュエル・ウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein、1930–2019）¹¹らが提唱した、世界システム論の世界文学版だということもできる。世界システム論は経済、政治、社会局面における国境や地域を越えた交流のモデルであり、世界システムを構成する中心、周辺、半周辺は「分業」という形で相互依存する。中心は労働力、天然資源において周辺を搾取し、周辺は資本、技術、技術において中心に依存する一方、半周辺は中心、周辺双方の役割を共有する。カサノヴァやモレッティも共に世界を中心と周辺に分ける。カサノヴァは文学の首都たるパリを世界の唯一の中心と見立て、周辺の地域、言語で書かれた文学は、中心であるパリで認知され、賞賛されて初めて世界文学たりえるとした。一方、モレッティはパリとロンドンを世界文学の二都とし、近代文学の形式はこの二都で生成されて周辺に伝播し、周辺の地域や言語において、この近代文学の形式に則って書かれた文学は、やがて、二都に戻り、翻訳され、世界文学として流通するとした。

一方、中心であるパリやロンドンからもたらされた文学様式で書かれた日本文学は、両対戦間、朝鮮半島や中国に渡り、近代中国文学、朝鮮文学のひとつの礎になったという意味で、日本は世界文学システムにおいては、半周辺を形成していたのかも知れないと述べた。本講演では、まず、世界システム論のモデルをふまえた世界

2005年）；『ブルジョワ歴史と文学のあいだ』（みすず書房、2018年）；『遠読』（みすず書房、2016年）など。

¹¹ ウォーラーステインは、アメリカの社会学者、経済史家。彼の研究は政治経済学や社会学、歴史学など様々な分野を横断するもので、巨視的な観点から世界の歴史と社会全体を「単一のシステム」と捉える「世界システム論」を提唱・確立したことで知られる。

文学論を批判的に交差した後、BRICS、グローバル・サウスの台頭や、グローバリゼーションの進化にともない急速に変化し続ける世界、そして東アジアの文化的、とりわけ、文学的交流の現状を問い直し、さらには将来の変貌の可能性についても探求した。

三日目の基調講演は、最後の締めくくりとして、元ソウル大学日本研究所長の朴喆熙氏¹²が「東アジア日本研究者協議会の前進への提言」との演題で次のように述べた。

東アジア研究者協議会は 2016 年に初めて開催されて以来、「越境、学際、次世代」という三つの概念を持って纏まった。国境を超える、人文学と社会科学の境界を超える、世代間の隔たりを超えるという共有の精神が、発足以来、この協議会を支える基盤であろうと述べた。一つの国を超えた地域のネットワークを通じ、学問的対話を深め、知的交流を促進し、地域の更なる平和と安定につなげることは大変良いことであり、望ましい。そこで、今後協議会の益々の発展のために、皆力をあわせて前に進む覚悟と意志が必要として、以下の四点をあげた。(1) さらにお互い刺激となる議論の場を提供するよう努力すべきである。(2) 国境を越えた学問的共同体、または拠点作りも促すべきであり、次世代間の活動の場を設けるのも一つの方法である。(3) 国や世代を超えて同じ領域の専門家が単行本を書くプロジェクトを推進するのもよい。(4) そのた

¹² 朴喆熙氏はソウル大学政治学科卒業後、1988 年同大学修士（政治学）取得。1998 年コロンビア大学博士（政治学）取得。日本の政策研究大学院大学助教授、韓国の外交安保研究所、ソウル大学国際大学院准教授を経て、ソウル大学国際大学院の学部長及び教授、ソウル大学日本研究所長をつとめた。現職は韓国の駐日本大使となっている。主な著作に『代議士のつくられ方』（文藝春秋、2000 年）；『자민당 정권과 전후 체제의 변용（自民政権と戦後体制の変容）』（서울대학교출판문화원〔ソウル大学出版文化院〕、2011 年）などがある。

めには今まで 8 回に渡る協議会の参加者の連絡先を統合運用できるよう考えるべきである。以上の諸点における未来の可能性を思索した。

三 パネル発表の内容

表 1 2024 年東アジア日本研究者協議会の発表件数（テーマ別）

テーマ	一般 パネル	論文 発表	次世代 パネル	次世代 発表	合計
東アジアにおける歴史認識問題	1	2	0	1	4
東アジアにおける思想交流	2	23	0	6	31
東アジアにおける諸宗教の交流	5	18	0	4	27
東アジアにおける人・物の移動と変容	0	12	0	5	17
東アジアの高齢化問題・福祉問題	1	3	0	2	6
東アジアにおける日本語研究の諸問題	0	8	1	0	9
東アジアにおける社会とジェンダー	0	9	0	2	11
東アジアにおける社会運動	3	12	2	1	18
日本研究と文化表象	0	1	0	1	2
「世界文学」の中の日本文学	1	1	0	0	2
東アジアにおける経済、資本と国家	4	7	1	3	15
東アジアにおける政治と国際関係	3	0	0	0	3
AI・DX と共生する日本語教育	0	3	0	1	4
AI・DX と人間活動	1	16	0	3	20
その他	2	13	1	4	20
計	23 組 (113 名)	128 名	3 組 (14 名)	33 名	288 名

このように、本大会は 26 組のパネル発表、144 本の論文発表（47 名の博士課程大学院生と若手博士研究員による 3 組の次世代パネル発表と 33 本の次世代論文発表を含む）を行った。計 18ヶ国 463 名

の学者や博士課程院生等が参加し、参加者数は今までの記録を更新し、人的交流・知的交流において一定の成果をあげたと考えられる。テーマ別で見ると、「東アジアにおける思想交流」、「東アジアにおける諸宗教の交流」、「AI・DX と人間活動」、「東アジアにおける社会運動」などのテーマに関する発表が一番多く、ここから、東アジア諸国の交流と AI に対する関心が高く、より多様な観点と立場から日本研究を捉えようとする動きが窺える。台湾での開催により、東アジアの日本研究者が交流を深め、台湾と各国との人的交流・知的財産を蓄積したほか、分野を超えた共同研究、ならびに学术交流の基盤が形作られ、台湾の国際的な認知度を高めることに寄与したと考える。また日本研究を中国、韓国、台湾などの東アジア周辺に拡大させ、マクロ的視点から新しいネットワークを構築した。言わば、外側から志向することによって新しい道を見出すことができるのではないかと考えている。そして、次世代の日本研究者の育成にも力を注ぎ、積極的に支援することにより、大学院生や若手研究者が互いに切磋琢磨することを通じて良い刺激となること、将来の東アジアにおける日本研究の発展にもつながる。

最後に、協議会のさらなる発展のため、「東アジア日本研究学会」の設立が実現することは不可欠である。会員制の学会の運営を通じ、時代と地域の境界を越え、現代世界の動きを視野に入れながら、日本研究の重要性和共通性を見出し、知的交流と協力を深めていきたい。また、人文と社会科学の対話や若手研究者の育成を国際的に推進し、「国際日本研究」の可能性を広げ、共存と未来を見据えた空間を構築していくことが重要である。

